

# 実エンドウ新品種‘00-23’の育成

○中島純・市和人<sup>1)</sup>・鮫島國親・東郷弘之<sup>2)</sup>・江口洋<sup>3)</sup>・加藤善啓<sup>3)</sup>  
 (鹿兒島農試・<sup>1)</sup>鹿兒島県農政部・<sup>2)</sup>鹿兒島加工セ・<sup>3)</sup>前鹿兒島農試)

## 【目的】

本県の実エンドウは栽培面積が350haで、面積、生産量ともに全国一位であり、県の重要な園芸作物として位置づけられている。現在、主に栽培されている品種は‘スーパーグリーン’と‘ミナミグリーン’である。これらの品種は多収性ではあるが、耐寒性が弱いため、栽培する地域によっては降霜や寒波による減収が大きく、生産が不安定である。そこで、従来品種より耐寒性が強く、多収性の品種育成を目標に育種に取り組んだ。

## 【材料および方法】

平成8年2月に‘サツマグリーン’を母親に、‘ミナミグリーン’を父親として交配した。平成8～10年に無選抜で世代を促進し、平成10年の春どり作型でF<sub>3</sub>世代を62個体に展開し、3個体を選抜した。平成11年には選抜した3個体を75個体に展開し、20個体を選抜し、選抜した個体を個体毎に1系統とした。平成12年にF<sub>3</sub>世代で2系統を選抜し、平成13年にはF<sub>6</sub>世代でやや早生で莢の品質と収量性が優れる1系統を選抜した。その後、現地露地圃場での耐寒性の比較と実用性を確認するため、現地適応性検定を平成14～15年に揖宿郡山川町で2回、平成15～16年に阿久根市で2回実施した。また、平成16年には10月播種の作型で生産力検定を実施し、収量性と特性を検定した。その結果、目的の形質を持つ1系統を得ることができた。選抜した1系統は、平成17年5月にF<sub>9</sub>世代で育成を完了した。

## 【結果および考察】

### 1. 育成品種の主な特性

- 1) 現地適応性検定試験の結果から、降霜時に落花・落蕾・莢の裂傷が少なく、‘スーパーグリーン’に比べて耐寒性が強く、収量性が高い。
- 2) 節間長が‘スーパーグリーン’および‘ミナミグリーン’に比べて長く、草丈が高い。
- 3) 開花の早晩性は‘ミナミグリーン’と同程度であり、初花房節位は16節程度である。
- 4) 莢については長さが10cm程度、1莢重が12

g程度で‘スーパーグリーン’および‘ミナミグリーン’に比べて大莢である。

### 2. 栽培適応地域および適応作型

鹿兒島県北薩地域(準無霜地帯)、秋まき冬春どり作型

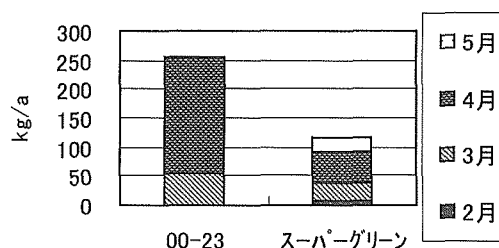


図1 現地適応性検定の月別収量 (2004年度, 阿久根市)

表2 降霜後の莢の被害調査 (阿久根市)

品種名	調査莢数	莢数			割合 (%)		
		正常	軽度	重度	正常	軽度	重度
00-23	100	94	5	1	94	5	1
スーパーグリーン	125	54	11	60	43	9	48

注) 軽度: 莢表面の30%未満が裂傷, 重度: 莢表面の30%以上が裂傷

降霜日: 2005. 2. 27 最低気温: -1.5℃

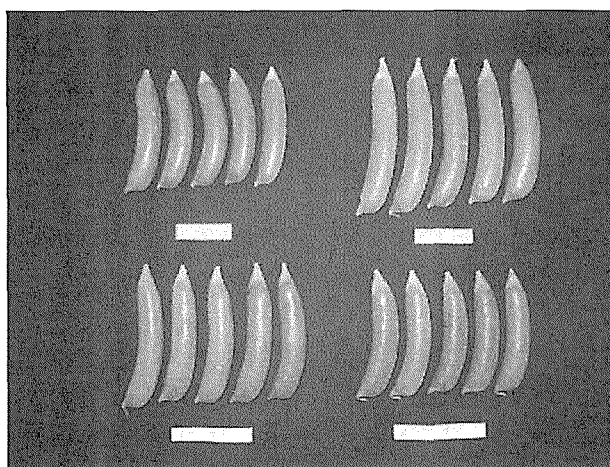


写真1 収穫莢の状況 (2005. 2. 21)

左上: 00-13, 右上: 00-23 (有望系統)

左下: ミナミグリーン, 右下: スーパーグリーン